空の細道　その十二　　「二つのお墓参りのこと」

朝方の雨がやんで晴れ間が覗いた。Sさんの奥さん、今や未亡人となったH子さんが迎えに来てくれた。朝の混雑を巧みに避けて、ピニェイロス川のトンネルをくぐりモルンビ地区に入る。行き先はSさんの眠るモルンビ墓地で、高級住宅や州知事官邸、サンパウロFCのスタジアムがあるこの地区の南西の端にある。カーブと上り下りを繰り返し墓地正門に着いた。近くの花屋で鉢植えのポインセチアと白い菊を二つづつ買った。

正門を通ると墓守たちが「ボン・ディア、おはよう」と挨拶する。H子さんが、ペット・ボトルを出して水を入れてきてと頼んだ。墓地は、園内中央道路の左右と正面立ち木の向こう側とに芝生が一面に広がる緑の庭園で、墓標が立っているわけでもない。道路右手の芝生をH子さんの後について歩くと花が囲む金色に光る墓標が芝生に埋まっていた。40年も前、ブラジル出張中に出会い、その後一緒に仕事をすることになったSさんが此処の地下の柩の中に眠っている。ブラジル生まれで日本で教育を受け、若くして再び生地に戻ってきた彼、草創期の会社でのこと、退職後に一緒に旅をしたことなど諸々のことが去来する。花を綺麗に並べて、H子さん持参のお線香立てにお線香を上げて、祈った。6月21日が一周忌になるが、その日にはもう日本に帰っている。ブラジルの国民的英雄F1ドライバー、アイルトン・セナの墓も立ち木の向こうの一画にある。

この墓地も彼が生前に買っておいたものだという。経済的には使い切れないほどのものを残してくれた、とH子さん。目に入れても痛くない一粒種のお嬢さんも、彼の生前、日系弁護士と結婚して、父親を安心させた。今、彼女は新婚の夫を残して日本企業の研修で二年間日本滞在中である。8月には彼も日本に出向き休暇をともに過ごすという。日本移民100周年の2008年に逝った彼とその家族。退職後の闘病の日々にも前向きに、旅に趣味に家族のために生きた彼。若いころからの苦労が報われた一生だったと言えるのではないか。H子さんも、そうですね、と明るく頷いてくれた。

サンパウロとその南の州パラナ州の州都クリチバを結ぶ国道116号線を南西に40キロほど下るとイタペセリッカ・ダ・セラという小さな町がある。セラ（セッハ、と発音するほうが近い）は山のことなので、文字通り山の上の町だ。この町外れ、舗装されていない道を数キロ走った所に1976年に建てられた「金閣寺」がある。駐在時代に出来たのだが、当時は日系社会との関わりもそうなかったせいか、此処まで足を運ぶこともなかった。山門を入るとすぐ左に管理事務所がある。日本式に言えば納所というべきか。なにしろ山の斜面を利用して作ったので、深山幽谷の風情がある。我が家の四人に加え、家人の妹や甥まで目のレーザー手術をしていただいたドトールKさんのお墓がこの金閣寺にある。ホテルを出てから約1時間の行程である。

N先生の奥さんJさんの先導で、石の階段を下る。サンパウロより3度Cは低いのだろう、ひんやりとする空気の中を、さらに下る。両側には○○家の墓と刻んだ日本式の墓石が立ち並ぶが、なんだか様子が違う。良く見ると石の板で直方体の箱をつくり、正面の二段目には扉が合って鍵がついている。石柱になる石がないのか、お骨収納の便利を考えた工夫か確かめそこなった。もう一段下ると金色に塗装した金閣のレプリカがいきなり目にはいった。左手に水面が見える。金閣の裏を回って池の向こう岸に行った。振り返ると、絵葉書の京都金閣寺のような風景画あった。日系人が故国や先祖の地を偲ぶ想いが痛いように伝わる。ブラジルブームの70年代の建設だから日本企業の寄付などもあったのかもしれない。K先生は金閣一階のお墓のアパートの一室、ロッカーのような扉を開くと小さな骨壷の中に眠っていた。別に設えられた仏壇にお灯明を灯し、お線香をあげてお参りし、生前の彼を偲んだ。彼のクリニックは眼科医になった娘、息子の二人が引き継いで、大いに繁盛している。Jさんは、若々しく今も夫の生前と同じように、クリニックの事務を取り仕切っている。K先生の遺したものに感謝し、子供たちの成長と成功を見守る毎日である■